

夫婦で研究者を続けるために

How to Continue each Career as Researchers with Kid

新倉謙一 Kenichi NIIKURA

なぜ私が高分子学会の男女共同参画の委員に指名されたかといえば、おそらく夫婦でそれぞれに大学で高分子関連の研究に携わっているからだろう。このコラムは先輩からのメッセージというタイトルであるが、暗中模索中の私はメッセージというよりむしろ2歳児の子育てを通じてカップルで研究者であることに関して感じたことを書いてみたい。

私は夫婦ともに運良く同じ研究機関で働いたこともあり、子供ができるまでは男女の違いを意識することはほとんどなかった。結婚したといっても独身時代と生活スタイルはあまり変わらない。時間に縛られることなく、好きなだけ実験室で過ごした。二人とも研究者であるこの点は楽であった。ところが、子供ができてすぐ生活が一変した。妻は妊娠中に自宅安静といわれた時期もあり、産休（通常14週間ぐらい）のほかにもかなり仕事を休まざるをえなかった。男女共同とはいっても男女の違いはここで痛感する。また、お互いに実家が遠く、親もまだ働いていたため、頼りになる身内もない。そうなる私にできることは、なるべく早く帰宅して家事などをサポートすることだった。ただ大学の研究室は、時間の使い方は別にして、朝から夜遅くまでいなくてはという雰囲気が漂う。実際、教授がいるなか夕方6時半すぎに研究室をでるのを申し訳なく感じていた。しかしミーティングの時間を早めるなど、研究室の皆さんの理解にとっても感謝している。

出産後、妻も私も育児休暇は取らず、娘は生後9週目に保育園デビューをした。保育園は朝8時から夕方6時までである。誰かが迎えに行って夕食やお風呂など子供の面倒をみる必要がある。ここで一番大切なのはパートナーである男性の育児参加であろう。こう言うと堅苦しいが、要はパートナーにも研究を続けてもらいたいと思っているだけ



である。研究者カップルの多くは、お互いを同志とされていて、自分自身も研究環境を手に入れるつらさがわかっているだけに、パートナーにも好きな仕事を継続してほしいと思っているのではないだろうか。私も保育園に連れて行ったり、早く帰宅して家事などはやったつもりだが、それでもパートナーからすればかなり物足りないだろう。出産後は体調を崩しがちだし、子供が熱を出したときは妻のほうが休んでくれた。

大学のポジションも流動的で、この3月からは妻はもうすぐ3歳になる娘と一緒に東京に移り、私は北海道という生活になった。一緒にいるときはたいへんと思っていながらもなかなか気づかないが、育児は人生のある期間だけの貴重な体験だと思う。私は平日は時間に縛られることなく研究に取り組めるが、週末はできるだけ家族との時間をつくるようにしている。しかし結局、子育てに関してはパートナーにおおきな負担をかけており、男女共同参画の意義を痛感している。人にはいろいろな選択肢があると思うが、女性研究者が出産を理由に仕事をやめてしまうというのは社会的に見てとてももったいないことである。子供がいても女性が働きやすい職場環境をつくっていくことは、男性パートナーだけでなく優秀な人材を欲しているすべての人にとって大切な課題であろう。



北海道大学電子科学研究所 (001-0021 札幌市北区北21条西10丁目)・准教授、博士(工学)。1997年東京工業大学大学院生命理工学研究科修了。専門は生体高分子、生物有機化学。